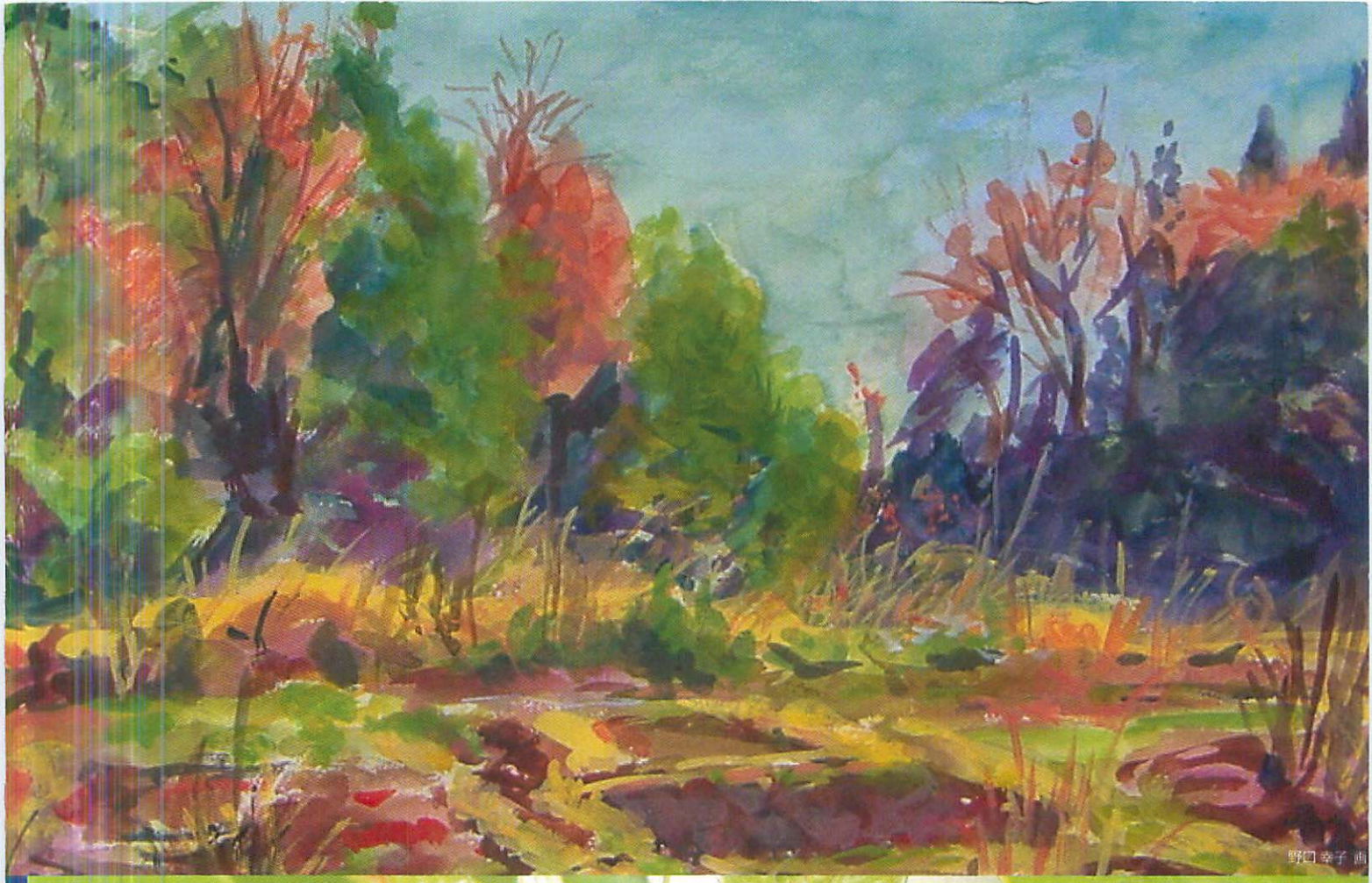


岡発戸の谷津田の鳥と自然［資料集］

平成14年6月

我孫子市鳥の博物館

はじめに

我孫子に残る貴重な自然

「岡発戸の谷津田」

魚や蛙と遊んだ小川や池、虫とりをした雑木林、ホタル狩りをした田んぼ、・・・いつの間にか見られなくなったなつかしい風景です。こうした風景は、人間が自然の恵みをうまく利用しながら稲作していたころに形づくられたもので、そのような地域を里やまと呼びます。

里やまでは、米や野菜を生産する田んぼや畑、その土を肥やす堆肥やくらしに必要な燃料を供給する周辺の雑木林、田畑に給水する付近の小川や池など、生活に必要なすべての環境要素が人が日常的に歩ける範囲内に整っていて、その中で物質がうまく循環していました。

しかし、産業革命以降、燃料が裏山から切り出した薪から石油・石炭に変化したことや、田畑に化学肥料が使われるようになったことにより、雑木林は無用になり失われてゆきました。また、交通手段の発達により、物資の移動が地球規模で行われるようになり、食料を生産する農村から遠く離れた地域で暮らす人たちが増えました。こうして、これまでだれしもが等しく享受できた豊かな自然環境は、多くの人にとって遠い存在になってしまいました。

このような状況を背景に、近年多くの人たちが、昔なつかしい里やまの風景や持続的な自然の利用方法に価値を感じ、その保全方法を模索しています。

我孫子を含む北総台地には、谷津と呼ばれる浅い浸食谷が無数にあります。人々は、古くから谷津に流れる水を利用し、稲作を行ってきました。このような田んぼを谷津田と呼び、地域の景観を特徴づけていました。しかし、急速に進む斜面や台地の造成工事に伴い、谷津田は次々に消失しました。現在、我孫子市内では、市の中央部の岡発戸・都部（おかほっと・いちぶ）地区の谷地に、昔ながらの谷津田の面影が残っています。

今回の企画展では、この谷津田の上流部にあたる岡発戸地域に注目し、自然環境に関してこれまでに知られていることがらを紹介します。

小冊子「岡発戸の谷津田の鳥と自然－資料集－」は、今回の企画展で参考にした既存資料の情報を集約したものです。加えて、谷津田で活動するナチュラリストの方たちに、それぞれの目から見た岡発戸の谷津田の自然も紹介していただきました。

この資料集によって、多くの人たちが谷津田に対する関心を深め、そのしくみを理解するきっかけになれば幸いです。

目次

1 空から見た我孫子の谷津田・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2 人と生き物が共存していた頃の谷津田・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3 ナチュラリストの目から見た岡発戸の谷津田の自然・・・・・・・・・・6

4 データで見る岡発戸の谷津田の自然・・・・・・・・・・・・・・・・・13

4-1 空から見た地域の概要・13

4-2 人のくらしと谷津田のかかわり・13

4-3 谷津田の水循環に関する資料・18

4-4 谷津田の生物に関する既存資料について・22

5 岡発戸の谷津田の生き物に関する現地調査結果・・・・・・・・・・・30

5-1 昆虫・クモ類・鳥類調査・30

5-2 鳥の博物館による月別センサス調査結果・35

5-3 その他注目すべき観察記録・38

6 今後の岡発戸の谷津田の自然環境調査へ向けて・・・・・・・・・・・39

岡発戸の谷津田と我孫子市谷津ミュージアム事業構想

我孫子市は、「我孫子市環境基本計画2001～2020」の中で、我孫子の谷津は「昭和30年代まで約2千年におよぶ長い時間保たれた」自然環境であり「我孫子市の原風景の象徴」であると位置づけています。

また、「谷津の価値を再認識して、そこで営まれてきた農業の知恵と工夫を将来にわたって残し、伝えていくことが現代の私たちに課せられた課題」としています。さらに、具体的な展開として、岡発戸・都部（おかほっと・いちぶ）の谷津をフィールドに、「手賀沼の原風景としての谷津ミュージアムづくり」を目的とした、「我孫子市谷津ミュージアム事業」が平成14年度からスタートします。

1 空から見た我孫子の谷津田

我孫子市を空からながめてみましょう(**写真1**)。

我孫子市のほぼ中央、成田線の東我孫子駅に近い我孫子ゴルフ場の外縁に沿ってゆるやかにカーブする広い谷が見つかるはずです。ここは岡発戸・都部（おかほっと・いちぶ）の谷津と呼ばれ、我孫子市内では数少ない昔ながらの自然が残る場所です。

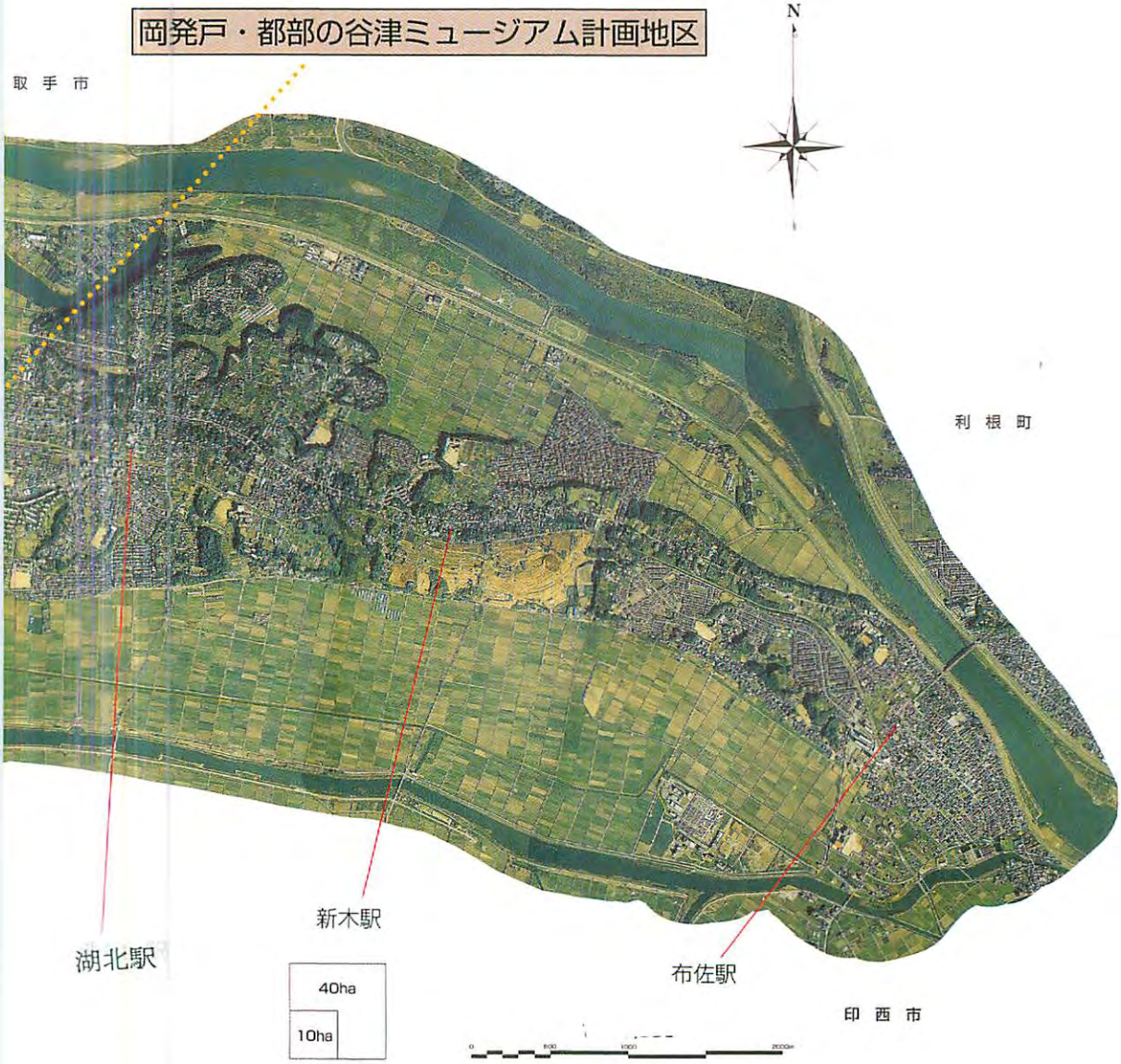
この谷津を手賀沼側からたどると、手賀沼下流域(下沼)北岸からの流入河川「湖北集水路」をさかのぼる流路沿いに広がる谷であることがわかります。

今回の企画展で注目したのは、この谷の上流部にある岡発戸の谷津田です。

林に囲まれた岡発戸の谷津田に立つと、周辺のにぎわいから隔離された、落ち着いた雰囲気の景観が目の前に広がります（**写真2**）。

写真1　空から見た我孫子
（我孫子生活環境図集　1998より引用）

写真2　岡発戸の谷津田の風景



2 人と生き物が共存していた頃の谷津田

谷津田は、稲作が始まった2千年前から昭和30年前まで延々と変わらずに維持されてきた土地利用の形態です（我孫子市環境基本計画2001～2020）。

谷津田が人間のくらしの中でどのように維持されてきたのか、また、生き物の生活の場としてどのようなはたらきをしていたのか、考えてみましょう。

谷津田の環境を構成する三大要素は、1.小川や池、2.田んぼ、3.雑木林です。

これらの環境構成要素について、順番に見てみましょう。

1.小川や池

小川や池（写真3）は、田んぼや畑へ水を引くために維持されてきました。農家の人たちは、田んぼや畑にうまく水がまわるように、溝や矢板を組み合わせて、水の流れを自在に管理してきました。崩れた水路の補修や溝につまった泥や落ち葉を取り除くための泥上げも、大切な作業だったことでしょう。

斜面林から浸みだした水だけでは田畑への給水が不足しがちなので、ため池がつくられました。ため池の水が汚れたり、水草が繁茂し池が埋まってしまうことのないように、池の水抜きや日干しも行われました。

小川や池は、谷津田にすむ水生生物にとって、渇水期の避難場所にもなっていました。例えば、春先に水の張った水田で孵化したメダカやミズカマキリは、稲刈り後の水を落とした田んぼでは生きていくことはできません。しかし、付近に冬でも水の枯れることのないため池や水たまりが残っていれば、そこで生きていくことができます（図1）。

また、サギ類やカワセミなど、ここにすむ水生生物を餌とする鳥たちも集まってきました。

写真3　谷津田と池

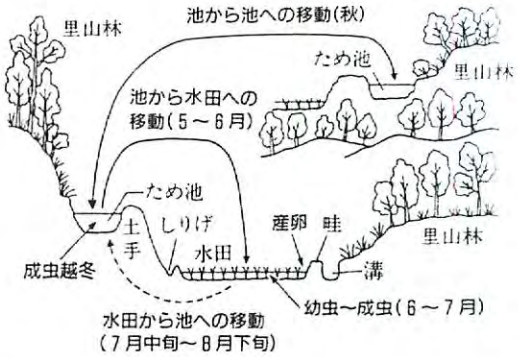


図1　ミズカマキリとため池の関係
（「日比・山本　1997　里山の自然」より

2.田んぼ

田んぼでは、毎年稲作が行われます（写真4）。田おこし→施肥→水入れ→しろかき→田植え→除草・害虫駆除・追肥→水抜き→稲刈り・乾燥、毎年決まったスケジュールで管理されています（図2）。

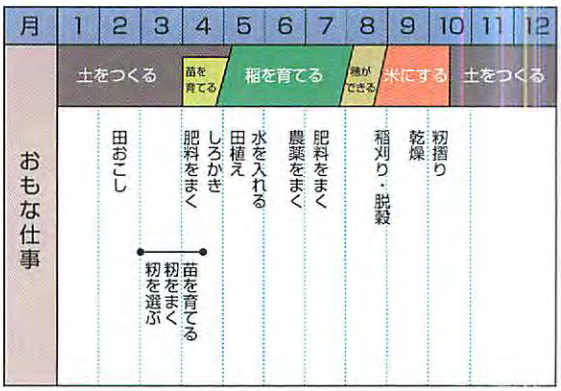


図2　米つくりのこよみ
（「我孫子市　1996　わたしたちのあびこ」より

田んぼは、米を生産する場ですが、見方を変えると、一年周期で広い水面が出現する人工的な低湿地ということができます。こうしたことから、田んぼは、それまで湿地にくらしていた生き物たちにとって、すみやすい新たな生息環境となりました。

3.雑木林

雑木林は、人手によって維持されてきた林です。

関東地方では、人の手が全く加わらない林（原生林）は、シイ・カシなどの常緑広葉樹林になります。

写真4　谷津田の田んぼ

写真5　谷津田の雑木林

一方、下刈りや定期的な伐採など人が手入れをしてきた林（雑木林）は、落葉広葉樹林として維持されます。

常緑広葉樹林では、樹冠部に一年中葉が茂っているため、林内は暗く林床の植物はよく育ちませんが、落葉広葉樹林では、秋に落葉してから翌年木々が芽吹き始めるまでの間、林内に日光が差し込み、林床の草花が一斉に花を咲かせます。そして、林床の花の蜜や種を求めて昆虫たちが集まってきます。

また、落葉広葉樹林では、秋の落葉に合わせて落ち葉が集められ、作物を育てるための堆肥がつくられます。枝打ちや伐採で切り出された小枝は一カ所にまとめられ、さまざまな農作業に利用されます。このような堆肥や朽ち木のマットが積もった場所は、カブトムシやカミキリムシの幼虫の格好の生息場所になります。

落葉広葉樹林には、多様な生き物を育む条件が備わっていたのです。

図3　雑木林の管理の図
（「亀山章　1996　雑木林の植生管理」より

3 ナチュラリストの目から見た岡発戸の谷津田の自然

岡発戸の谷津田の自然に関心を持ち、観察しつづけている人たちがいます。鳥の博物館の友の会会員の中に、この谷津田をフィールドに活躍しているナチュラリストの方がいます。

自然観察のよろこびを知った達人たちに、岡発戸の谷津田の自然の魅力や楽しみ方を紹介してもらいましょう。（名前の五十音順に紹介させていただきました）

谷津田の虫たち

文・写真 木村稔さん

（鳥博友の会会員、我孫子野鳥を守る会会員）

岡発戸の谷津は大人にとっても、虫と遊んだ子どもの頃が蘇ってくる楽しい場所だ。

春、4月に入ると谷津田は花と虫で賑やかになる。越冬していたキチョウ、キタテハ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミが眠りから覚め、ツマキチョウ、モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ヤマトシジミ、ベニシジミが飛び始める。農道を一直線に飛んでいくツマキチョウは一ヶ月ほどで姿を消してしまうから見逃せない。

中旬から5月に入るとギンイチモンジセセリ、ルリタテハ、キアゲハ、ナミアゲハ、ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ等大型のチョウも勢揃いする。数は少ないがコミスジ、ヒメアカタテハ、ゴマダラチョウも見られる。日陰の道ではヒメジャノメ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、イチモンジチョウがいる。トンボはシオヤトンボが一番早く姿をあらわす。続いてシオカラトンボ、アジアイトトンボも池の周辺で見られるようになる。

夏も近づくと、ノシメトンボ、マイコアカネ、ナツアカネ、コシアキトンボ、コフキトンボ、チョウトンボ、ショウジョウトンボ、オオシオカラトンボやウチワヤンマ、ギンヤンマ、オニヤンマ、オオヤマトンボなど子どもの頃、目の色を変えて追いかけたヤンマの仲間も出揃う。

真夏になるとウスバキトンボが出てくる。チョウ、トンボ以外では子どもに人気のカブトムシ、コクワガタ、タマムシ、セミの仲間、シロスジカミキリ、臭い匂いで嫌われるが模様のきれいなアカスジキンカメムシがいる。ヤマトシリアゲムシは求愛給餌をするところが見られるかもしれない。ホタルガ、カノコガは昼間飛ぶからすぐ見つかる。オオミズアオは谷津最大のガで色もきれいだ。オオスズメバチは大きくて立派だがちょっと怖い。ミツバチ、フタモンアシナガバチは普通に見られる。

7月から8月にかけてヘイケボタルが夏の夜を楽しませてくれる。

秋はアカタテハ、ヒメアカタテハ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミが目立つようになる。トンボではウスバキトンボ、ナツアカネ、アキアカネは11月まで見られる。オオアオイトトンボは11月末にニワトコの木にタンデムで産卵する姿が見られる。越冬するトンボはホソミオツネントンボだけで数が少なく、めったに見られない。移動の途中で立ち寄ったアサギマダラや短い期間だけ出現するハグロトンボも出会えたらラッキーだ。

谷津田で目立つクモは大きな網を張るコガネグモ、ナガコガネグモ、ジョロウグモだ。気をつけてみると足元や草の葉の間にもたくさんの種類のクモが見つかる。

昆虫たちは谷津田の様々な植物や水場に支えられて生きている。虫たちに生活の場を残してやろう。

岡発戸の谷津田周辺の虫たち

左上から下へ順に

❶キチョウ
❷ツマキチョウ
❸ルリタテハ
❹アオスジアゲハ
❺ゴマダラチョウ
❻ギンイチモンジセセリ
❼マイコアカネ
❽ウチワヤンマ
❾ギンヤンマ
❿オニヤンマ
⓫コクワガタ
⓬タマムシ
⓭アカスジキンカメムシ
⓮ホタルガ
⓯オオスズメバチ
⓰アカタテハ
⓱ウラギンシジミ
⓲オオアオイトトンボ
⓳コガネグモ
⓴ナガコガネグモ

谷津のいろ

文・写真 首藤美恵子さん
（鳥博友の会会員、我孫子野鳥を守る会会員）

1997年ころから足繁く谷津に通った。その中で私の心の中に印象に残った色を書き留める。

“白” 1998年1月には何回も雪が降った。その度に動物の足跡を探しに駆けつけた。ただ一度だけ野兎の足跡を記録することが出来た。地元の人からはタヌキもいると聞かされるが足跡を見かけることはなかった。

“ピンクとブルー“かっては湖北寄りの梅林では、春になって梅が咲きそろい林がピンクになるころ、林床はオオイヌノフグリの花でブルーになり春一番を感じたものだ。春一番と言えば栗林の林床もヒメオドリコソウが一面に咲いてピンクに覆われる。

“グリーン“ある年の新年早々谷津を訪れると草木は枯れて色は無く寂しい情景であった。少し歩くと足元に鮮やかなグリーンのヤママユガの繭が目に入った。繭は近年天蚕として注目されている。幼虫はクヌギやカシなどが必要である。

“パープル“花の紫は一年を通して多く見られるが、11月中旬ともなるとムラサキシキブ、ノササゲの実がつややかなパープルを見せてくれる。両者とも花はあまり気にとめるほどではないが、実は誰をも魅了する。

今ではこのように見られなくなった色もあるが、出来得る限り守っていきたい。

ヒメオドリコソウ

オオイヌノフグリ

ヤママユガの繭のぬけがら

コムラサキ

ノササゲ

谷津田の雪景色（1998年1月9日）

雪上のノウサギの足跡（1998年1月29日）

岡発戸谷津田の四季

文 染谷迪夫さん
（鳥博友の会会員、我孫子野鳥を守る会会員）

今、里山や谷津田に関心が高まっています。我孫子市にも、岡発戸にふる里の原点とも云うべき里山や谷津田の雰囲気や景観を、色濃く残した場所があり、私達を楽しませてくれます。この谷津田はJR成田線の東我孫子―湖北間の南側と我孫子ゴルフ倶楽部の北側に位置して、東西1,500m、南北200mで約30ｈａで広がり、斜面林と休耕田で形成されています。斜面林はシイ、カシ類の常緑樹、コナラ、クヌギ、シデ類の落葉樹が混じりあった雑木林で、一方休耕田は、中央に用水路が走りヨシ、ガマ等で覆われ湿地植物が生えています。休耕田は一部畑や水田として使われています。

谷津田は季節によっていろいろな姿を見せてくれます。これから、谷津田の四季をご案内いたします。

春－いのちが輝きだす季節

春はいのちが輝きだす季節です。日差しは明るく強くなり水はぬるみ、昆虫達やヘビやカエルは眠りからさめ動きだします。木々は芽吹き、野草は花をつけ、斜面林は柔らかい緑に包まれ、心地よい春風がそよいでいます。鳥達は冬鳥と夏鳥が入れ替わる時期です。冬鳥は北へ帰る準備を始めます。アオジやアカハラはのどかに囀り始め、カシラダカは甘い声で歌いだします。

夏鳥は 4月下旬には、斜面林や谷津田に現れ山へ行く途中、一休みし、さえずりの練習をしています。山へ着く頃は、うまくなっていることでしょう。キビタキ、センダイムシクイ、カッコウ、ホトトギス。ウグイスやヒバリやホオジロは今年も歌っています。3月にはヒキガエルのカエル合戦も見られ,おびただしい紐状の卵塊を見つけるでしょう。シュレーゲルアオガエル、トウキョウダルマガエル、アマガエルの鳴き声も聞こえて来ます。鳴き声チェックも楽しいものです。

可憐なツマキチョウ、小型で可愛らしい春型のアゲハやキアゲハ、越冬したベニシジミやモンキチョウに会えるでしょう。ツクシやヨモギも春が食べ頃です。ツクシご飯や草餅は春の風物詩です。農道や道端では、ツボスミレ、タチツボスミレ、アリアケスミレ、ノジスミレ等スミレの仲間に会えるでしょう。晩春にはトンボも現れます。羽化したばかりのシオカラトンボのなんと美しい事、新種と見まごうばかりです。

岡発戸の春を楽しんで下さい。訪れた回数だけ新しい春を発見できます。

夏－いのちの成長の季節

梅雨時のうっとうしい雨の晴れ間に、訪れては如何ですか。樹木は若葉でみずみずしくやさしい緑に心がなごみます。

夏鳥が山へ行く途中の囀りが聞こえます。カッコウ、ホトトギス。風の具合で沼のほうからオオヨシキリの声も聞こえるかも知れません。

梅雨が明けると、谷津田も本格的な夏になります。斜面林は濃い緑に変わり、ヨシやガマは背高く伸び一面に生い茂ります。雑草も充分に成長して、農道を歩くと草いきれを感じ夏の季節を実感出来ます。

湿地には夏の野草のヌマトラノオ、ハッカ、アカバナ、ミゾカクシ等が咲き、斜面林では、クワガタやカブトムシが、カシやコナラやクヌギの樹液を求めて集まってきます（早朝が確実性が高い）。昆虫界の殺し屋オオスズメバチもやって来ますからご注意。

セミの声もにぎやかです。アブラゼミ、ミンミンゼミ、ニイニイゼニ、ヒグラシ、ツクツクボウシ。

カワセミ池にはギンヤンマやウチワヤンマ、シオカラトンボが飛び交い、斜面林に沿ってオニヤンマがパトロールしています。アゲハ類も大型になり逞しくなっています。運が良ければ、日陰でアオダイショウに会えるかも知れません。7月も下旬になると、ヘイケボタルに出会えるでしょう。夜7時すぎ、幻想的な青白い光にお目にかかれます。

最も暑い時期ですが、帽子を被って日向に出ると、たくましい野生に出会えます。

秋－いのちの実りの季節

9月に入りますと、朝夕には空気が澄んでくる気配を感じ、空は青く高くなり爽やかになってきます。谷津田は確実に秋になっていきます。

モズはたか鳴きを始め、サシバやツバメは秋の渡りの準備を始めます。冬鳥は帰って来始めます。夏に成長した植物は実をつけ、次の世代への引継ぎの準備をはじめます。植物の実は種となり、他の生物や自然の力を借りて、より遠くへ移動し繁殖する努力をします。

風に乗って移動するもの、転がって移動するもの、食べられて移動するもの、水の流れを利用するもの、様々です。どんな植物がどんな方法で、子孫を残す

か調べて見るのも楽しいでしょう。夏の間、山の方へ行っていた赤トンボも帰ってきます。岡発戸にも数種類の赤トンボがいます。ナツアカネ、アキアカネ、ノシメトンボ、マイコアカネ、何種類に合えるでしょう。

野草も咲いています。カントウヨメナ、シラヤマギク、ユウガギク等キクの仲間、ツリガネニンジン、ミズヒキ、キンミズヒキ、アキノタムラソウ、センニンソウ、ツルボ、タデの仲間、挙げたらきりがありません。皆さん自身でご覧下さい。秋の七草クズ、ススキ、ハギ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ、ナデシコのうち岡発戸ではいくつ見つかるでしょう。鳴く虫達にもであえます。エンマコオロギ、カネタタキ、クサヒバリ、ウマオイ、カンタン、耳を澄ますと自然演奏会です。

秋も終りになると、厳しい冬を過ごす為の準備を始めます。木々は紅葉し、野草も色づき草紅葉が美しくなります。昆虫達は地面に潜ったり、暖かい落ち葉の下に入ったりしています。落ち葉をそうっとめくってみると思いがけない発見があるかも知れません。

冬ーいのちの休息とねむりの季節

岡発戸では、初冬まで紅葉は続きます。モミジやハゼの仲間はすでに赤く色づいています。コナラやクヌギやケヤキやエノキはゴールド色に輝いています。朝日夕日に輝く木々は目をみはるほどの美しさです。どんな木が何色に紅葉するか調べて見るのも楽しいでしょう。山の小鳥はすでに里に降りています。斜面林や谷津田でアオジ、ツグミ、アカハラ、シロハラ、ルリビタキ、ベニマシコ、この時期は一年で最も多くの種類に出会える時期です。鳥の姿を見るには一番いい季節なのです。

虫や小動物達は冬ごもりの最中、静かにしておいてあげましょう。卵でいるもの、幼虫でいるもの、成虫のままでいるもの、様々です。それでも暖かい日には出てきたりします。

谷津田は冬枯れで一面枯れ草で覆われています。しかし野草たちは、あるものは種で、あるもの根で、またはロゼットで、木々は常緑樹は枝先や葉の脇に芽となって、又落葉樹は枝に冬芽となって春の来るのを待っています。この季節は木の芽を観察するのに良い機会です。ルーペや虫めがねを持って出かけましょう。葉芽や花芽の違いを見分けるのも楽しいでしょう。ロゼットが成長したらどんな植物になるのか想像するのも面白いでしょう。

雪の日にも出かけてみてはいかがですか？谷津田の素晴らしい雪景色を見ることが出来るでしょう。雪の積もった地面で夢中になってエサを探す小鳥たちに会えるでしょう。いかにも無防備な様子で、大丈夫かと心配するくらいです。
冬の谷津田は静かですが、出かけて見ると新しい発見があるかも知れません。

岡発戸の谷津田は、四季折々にいろいろな姿を見せてくれます。一年を通して訪れると、谷津田が生きている事に気づかされるはずです。そして、そこにすむ生き物達が懸命に生きていることがわかるでしょう。

ニホンアマガエル（上）とシュレーゲルアオガエル（撮影:木村稔）

アオダイショウ（撮影:木村稔）

アズマヒキガエル（撮影:木村稔）

キンミズヒキ

ツリガネニンジン

ニワトコの落葉痕（撮影:首藤美恵子）

カワセミ池

文・写真 中野久夫さん
（鳥博友の会会員、我孫子野鳥を守る会会員）

我孫子野鳥を守る会では、1999年5月から岡発戸谷津田の旧耕田約300坪（田圃150坪、栗林150坪）を借り、谷津田環境の復元を試みました。みんなで協力して田圃の草を刈り、池を掘って水を張りメダカ・ドジョウ・モツゴなどを放すと、さっそくカワセミやってきましたので、「カワセミ池」と名づけられました。

メダカはすぐに繁殖をはじめ、今では数倍に増えています。また池を作った翌春からアカガエルやヒキガエルが卵を産みはじめ、多数のオタマジャクシが孵るようになりました。

カワセミ池の看板

メダカ

アカガエルの卵塊

打水産卵中のオニヤンマ

ガマとフトイ

赤米（撮影:西巻実）

カルガモ

湧き水の取水路

作り始めた頃のカワセミ池

夏にはトンボやアメンボ・ミズスマシなどの水生昆虫もやってきて繁殖し、ツバメが水面上を飛交い、ゴイサギ・コサギ・チュウサギ・ハクセキレイ・セグロセキレイなどの水辺の鳥もやってきて、餌取りする風景も見られようになりました。

また、水辺ではガマ・フトイ・オモダカなどの水生植物が育ち、畦や土手では草刈するたびに育つ草が入れ替わり、季節応じて移り変わる草花やそれにやってくるいろいろな蝶を見るのも楽しみです。ミニ水田も作り、赤米・黒米などいろいろな稲を作り楽しんでいます。特に、1999年秋に房総風土記の丘の「ふるさと祭り」でもらってきた籾をまいて作った赤米は、ノギが長くて大きな真っ赤な穂で、本当にきれいです。刈り取った稲をはざ掛けしておくと、早速籾を食べにカルガモがやってきます。

栗林では、秋に大きな栗が沢山実り、毎年9月の秋分の日頃にみんなで集まり収穫祭をやるのが恒例になりました。

今では、カワセミ池は狭いながらもミニ谷津田風景を楽しめる絶好の場所となり、岡発戸谷津田観察の拠点になっています。

カワセミ池のただ一つの悩みは水の確保です。池から南のゴルフ場側斜面沿いに50m以上の取水路を掘り、湧き水を集めていますが水量は十分でなく、夏には水張りする池の数を制限しています。特に雨不足のときは深刻で、昨年7月には池の大半が干上り、2トンの水を給水してなんとかメダカやモツゴなどの池の魚を助けることが出来ました。

収穫祭

岡発戸がすき

文・絵 野口幸子さん

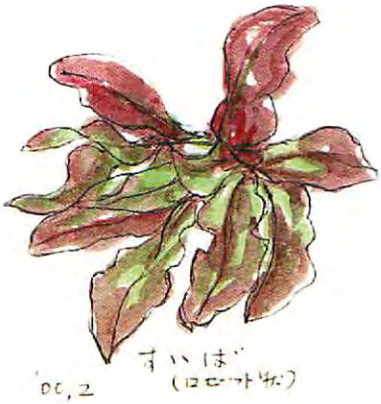
（鳥博友の会会員、我孫子野鳥を守る会会員）

「岡発戸」という地名は、鳥の仲間と自然観察を始めて以来、よく私の口をついてでる。そこは住宅に囲まれた小さな谷津田。今、我孫子市にとって希少価値的存在となってきている。４年前、はじめて足をふみいれた頃は、探索する自分達以外誰にもあわなかった。今は違う。いろいろな思いの人達と出あって挨拶をかわす機会が増えてきた。

私は野草に関心があるので（自分でスケッチをする）、植物に詳しい仲間の説明を聞きながら下ばかり見て歩く。四季折々の花は小さいけれど、ルーペでみると、その精巧な形や、色の美しさに魅せられる。昔の名づけ人に感心したり（ウラシマソウ）、何故なの？と、問いかけたくなる野草（ハキダメギク）がある。夏は草丈が高く歩行が大変だ。秋は結実の面白さと、クサモミジの美しさが待っている。冬はクイズを当てるように、寒さに耐えるロゼット状の野草をみながら「春にならないとわからない」と投げだしてしまう時もある。普通に歩けば30分位でおしまいになる場所を３時間かけて歩く楽しさは格別である。更に視野にはいるトンボ・チョウ・クモ達にみとれたり、鳴き声を聞き、双眼鏡で鳥さがしをする等、興味の対象が豊かである。

私は岡発戸で共生している生物の仲間として、これからも歩きつづけていきたい。

谷津の景色のスケッチ



野口幸子さんの谷津田スケッチ

上から下へ順に
ウラシマソウ
ウラシマソウの果実
ハキダメギク
スイバのロゼット葉

岡発戸 谷津田の自然

文 向井章雄さん
（鳥博友の会会員、我孫子野鳥を守る会会員）

私が岡発戸の谷津田を知ったのは、４年程前になります。市街地の近くに残された数少ない谷津田には、どんな動植物が生活しているのだろうか、と云う単純な動機で毎月１回出かけては３年間観察を続けてみました。

ここの谷津田は東西に細長く、南向きの斜面林、北向きのゴルフ場斜面林と云う立地から、日当りの良い場所とそうでない場所が対照的になっています。従って、四季のなかでも日差しを求める植物や昆虫の種類と、日陰を好む種類とがみごとに住み分けしています。鳥は中央の葦原に身を隠したり、南北の斜面林を行き来しています。

我孫子野鳥を守る会でお借りした土地を皆で掘り起こし、水を引き込んだところ、真っ先にやってきたのはカワセミでした。続いてギンヤンマやシオカラトンボ、イトトンボが産卵にやってきました。

観察を始めて間もない頃、休耕田でコサギが20cmもあるドジョウを飲み込むのを見ました。驚いたのはあんなに大きなドジョウがそこに潜んでいた事にです。

昆虫は、厳しい自然の掟も見せてくれました。セミを捕食するオオカマキリ、生きたまま寄生虫の卵を産み付けられた蛾の幼虫、クモの巣にかかった蝶。

しかし春にはツマキチョウやアゲハが舞い、メジロやホオジロが気持ち良く囀ります。夏には平家ボタルが童心に返してくれます。秋にはマイコアカネが可愛らしく頭をかしげます。冬にベニマシコの声を聞き、夢中で姿を探し求めたこともありました。この冬にはアカゲラも出たようです。

四季を通して鳥や昆虫、植物にこんなに楽しませてもらえる谷津田の自然を皆で大切に残していきたいと思います。

日当たりのよい斜面

鳥の隠れ家になるヨシ原

日陰の小径

斜面の下の水たまり

セミを食べるハラビロカマキリ

オニグモ

データで見る岡発戸の谷津田の自然

4

地図や航空写真、あるいは土地利用の状況、これまでに調べられた自然環境情報など、岡発戸の谷津田の自然を理解するために役立ちそうな写真・図・調査データなどを集めました。

岡発戸の谷津田の自然を考えたり観察する時に役立ててください。

4-1 空から見た地域の概要

地域の全容を把握するには、空から見るのが一番です。地形や植生の分布などの特徴をつかんでみてください。また、小さな生き物になったつもりで、航空写真や地形図上で、岡発戸の谷津田の中を疑似探険すると、またちがった世界が見えるはずです。

●航空写真でみた岡発戸の谷津田（写真6）

航空写真で岡発戸の谷津田をながめてみましょう。斜面林の広がりの様子や水田・休耕田の分布などがまるで手に取るように分かります。空飛ぶ鳥には、谷津田の自然がこのように見えているのでしょう。

●地形図で見た岡発戸の谷津田（図4）

土地感をつかむために、地形図は欠かせません。斜面の傾斜や方向、水系の広がりなど、地形図を"読ん"でみてください。

4-2 人のくらしと谷津田のかかわり

谷津田は、人のくらしの中で保たれてきた自然です。植生あるいは土地利用に加えて、人間の管理のし方によって、そこがどんな生き物のすむ場になるのか、大きなちがいが生まれます。現在、岡発戸の谷津田が、人々のくらしの中でどのように位置づけられ、管理されているのか、これらを知るための手がかりになる情報を取り上げました。

●土地利用図（図5）

岡発戸の谷津田の水田は、現在その多くが休耕田あるいは放棄田です。

図5を見てください。岡発戸・都部の谷津内の谷底低地全18.4haのうち水田が41%、休耕田と放棄水田が47%、その他畑・盛り土などが22%であり、半分以上が休耕田と放棄水田になっています。

●農業の場としての位置づけ（図6）

谷津田は、米を生産するための農業の場です。現在、岡発戸の谷津田が農地としてどのように位置づけられているのか、我孫子市生活環境図集（我孫子市 1998）を参考に調べてみましょう。

岡発戸の谷津田は、「農振地域」として位置づけられています。農振地域とは、農業振興地域の整備に関する法律（農振法）によって、「今後10年以上は農業の振興を図る地域」として指定された場所です。谷津田の下流域の都部地区の水田は「農用地区域」であり「今後おおむね10年以上にわたり農業上の利用を確保すべき地域」です。

●自然公園および文化的遺産・社寺・史跡など（図7）

岡発戸の谷津田は、都部の水田を通り、手賀沼の水辺へと連なります。このように自然環境が連続的に移り変わる場所を生態学では移行帯（エコトーン）と呼び、環境の多様性が高く生き物の豊富な場所となっています。

岡発戸の谷津田の右岸側の斜面林および下流域の都部の水田から手賀沼にかけては、千葉県立印旛・手賀自然公園（自然公園法にもとづく県立自然公園条例による）に指定され、県内にあるすぐれた自然の風景地に位置づけられています。

このほか、谷津田に隣接して、山神社と水神社が残されており、谷津田がかつてどのように利用されてきたのか知る手がかりとなっています。

また、岡発戸の谷津田と都部の谷津田には、それぞれ岡発戸溜め、都部溜めと呼ばれる溜め池があり、昭和30年代中頃まで利用されていたことが分かっています。

●大字界（図8）

岡発戸・都部の谷津にかかる大字は、上流部が岡発戸、下流部が、都部、都部新田、上沼田の各地区です。（図8）